

ジョン・ロールズによる格差原理に見出される 〈誘因〉という要素

——その正義思考の方向づけを問う——

西 口 正 文*

The Element of Incentives Which is Found in the Difference Principle by John Rawls
—To Quest for Its Orientation toward Thinking Justice—

Masafumi NISHIGUCHI

構成

〔零〕立論のためのいくつかの前提

〔一〕問題設定と探索の方法

〔二〕格差原理に孕まれる〈誘因〉要素

〔三〕格差原理は道德上の恣意性をいかにして取り扱うか

〔結びに代えて〕

〔零〕立論のためのいくつかの前提

ここでは、この小論によって問題化しその解を見出そうとするところの立論の性格を明確化するための準備を図る。すなわち、この小論の取り挙げる主題およびそれに即して集中的に照準を合わせようとする問題について、さらにその問題への解を見出そうとする探索の過程について、第〔一〕節以降で立ち入って議論を展開するために、その議論にとっていくつかの前提となる事柄に関して述べておくことにする。

① 「諸個人を社会的に処遇する原則はいかにあるべきか」に対する妥当な解の未確定、という事柄。これは、処遇原則というきわめて一般的な事柄に関してなのであるが、この事柄への応答としてさしあたり意識されているように思われる“諸個人の属性に応じた処遇”から“諸個人の業績もしくは能力に応じた処遇”へという移行、これを以って妥当な解が確定するわけではない。属性に応じた処遇を正当化する根拠がないだけでなく、業績もしくは能力に応じた処遇を正当化する根拠もない¹⁾。

② 能力主義の、あるいはメリトクラシーの、実現可能性をめぐるどう考えるか、という事柄。この事柄を正面から問題化するという課題に取り組んだ議論〔広田照幸 2011〕

* 人間関係学部 人学関係学科

が見られ、その中身は、諸個人への社会的処遇の原則や体制として正当化されがちな能力主義やメリトクラシーをどのように認識するかという観点から、重要で注目すべきだと思うので、この議論についてここで簡潔に言及しておこう。

教育システムによる諸個人への評価が社会的選抜・配分のひとつの重要な基準として作用するに際して、能力主義（と業績主義）が基本原則となっていると、そしてまた、そうした基本原則が厳密に行き渡ることによって編成される社会体制のありようとしてのメリトクラシーが既に成立していると、そのように語られることがあるのだが、この議論はそのような語りの信憑性に疑念を提出する。この議論は、能力や業績を適切かつ正確に測定することは現代社会においてのみならず将来社会においても不可能であり、その測定には「不確かなテクノロジーと恣意的な権力」が介在するのを避けられないことを、明らかにしようとしている〔上掲論文 252-268頁〕。現代社会の現状ではしかし、完璧には為し難くとも近似的にでも能力主義やメリトクラシーによる社会的処遇をめざすことが望ましいとされる風潮が強いわけだが、その風潮に向けてこの議論は、まさにその処遇によって不利な生を——自己実現の経験における不利を——強いられた者たちは有利な生を享受できた者たちに対して正当な根拠を以って、能力主義的処遇の不当性を突きつけ補償を求める資格を持つことになる²⁾、と結論づけている〔同上 270頁〕。この議論の運ばれ方は、小論における問題関心からすると受容できるものである。

③ 諸個人への社会的処遇の原則に〈正義〉を導き入れる思考のひとつの可能性が示されていると見て取れるのが、ジョン・ロールズ流の正義論だ、という事柄。この事柄に関しては、ロールズ流正義論の意義を確認しておきたい。

ロールズによる理論構築の簡潔な集約と目される正義の二原理 (two principles of justice) では、まず第一原理として、各人のもつはずの基本的諸自由が（政治的な自由や言論および集会の自由や良心の自由や思想の自由や人身の自由などが）平等に保障されるべきことが述べられる。これら基本的諸自由を、ロールズが社会的基本財 (social primary goods) とする全体から除いたところに位置づく社会的経済的利益・便益（……これには不平等が生じ得るとされる）が想定され、これに結びつく地位や職業への獲得機会がすべてのひとに公正なる平等性において開かれていなければならないことが、第二原理の後半部で述べられる。いま記した社会的経済的不平等はしかし、すべてのひとの利益になると合理的に見込みうる限りでのみ、取り決められることが可能である。そのように、第二原理の前半部で述べられる。社会構成員すべてにとって社会的基本財を平等に持ち得ることを原則とし、その原則から逸れて不平等が持ち込まれる場合にはそこに厳しい制約が課せられていることが、知られる。

正義の二原理にこのような表現を採らせることになった、ロールズによる正義思考の基層には——そこにこそ正義思考の本来的な論理が表われている、と筆者が考えるところの、正義思考の基層には——、『正義論』の第二章での論脈から推定できる次のような見解がある。すなわち、各人はその出発点における社会システム上の境遇の相違にかかわらず同じ成功の見通しを有するべきだ、とする見解と同時に、生来の内的資産についての自然の巡りあわせという偶有性によって各人の善き生の実現度合が左右されないという見通しを有するべきだ、とする見解をも、両立させるかたちで最終的に案出される見解である。この見解に依拠してロールズが想定する社会秩序のあり方とは、不平等を持ち込むこ

とが不運なひとびとの暮らし向きの見通しにとって有利にならず、ただ単に幸運なひとびとにとっての暮らし向きの見通しをいっそう魅力あるものにしたり保護したりすることのみ帰結する、そのような行為体系の秩序であってはならないことになる、というふうにまとめられるのだ。こうして想定される、不平等に対する制約のあり方を表明する原理が、「格差原理」(difference principle)と名指されることになる。

④ 前項③で記した事柄と密接に関わる内容として、格差原理の含意をめぐっては疑念を差し向ける余地が生まれ得る、という事柄。正義の二原理の中に重要な位置を占める格差原理に向けては、多様な解釈がなされ得ることになるだろう。多様な解釈の中には、正義思考のありようとしての妥当性という観点から、軽視できない疑念として意識されることになるものがあるかもしれない。特に、すぐ前の段落で触れたところの、社会的巡りあわせという見地からも自然的巡りあわせという見地からも不運に見舞われたひとの善き生への見込みが、果たして格差原理のもとで正当に確保されうのか、という疑念、これを払拭することが困難のように思われる。この事柄は、小論の間おうとする中心内容となるのであって、特に第〔二〕節と第〔三〕節で論及する予定である。ここでは上記の指摘に留めておく。

⑤ 前項④で記した事柄を問い詰めていくにあたって、示唆を得ることができるように思われる先行研究がいくつか見出される、という事柄。特に小論では、フィリップ・ヴァン・パリスによる研究〔Van Parijs, Philippe 2003〕とジェラルド・アラン・コーエンによる研究〔Cohen, Gerald Allan 1992〕に——ロールズ流の格差原理が示す正義思考のありようへの批判性を帯びた研究に——注目し吟味した上で、小論での探索を深めるために生かしたいと思っている。

〔一〕問題設定と探索の方法

小論の目的は、ロールズ『正義論』の中の特に格差原理を対象として、そこに含意されている正義思考の中身を解明しようと試みることに、これにある。この目的を遂行するために、格差原理が招き寄せるその含意に関する解釈の仕方には幅が生じることを捉えた上で、格差原理をロールズ自身がどのような論理を以って導き入れることになったのか、という点に留意しつつ、ロールズによる正義思考の本来的な脈絡という観点からは、格差原理に向けてのいかなる見解を選び取ることが妥当であるのか、という問いを中心に据えて、探索するという方法を採用。その探索にあたっては、小論の問題関心から見て注目にあたいする先行研究の知見を吟味しそこから示唆を得つつ、筆者なりの視角からの（格差原理に対する）見解を提示する心算である。

筆者なりの視角とは、ひとまずはいわば抽象的に、次のように言い表わされる。すなわち、社会的にも自然的にも、また人生行路の中での運や巡り合わせにおいても、当人の責任の及ばない偶有性によってひとの善き生の実現度合が左右されるのを、可能な限り阻止すべきだ、というように³⁾。ロールズの論脈の中にも、不運に見舞われたひとにとっての善き生への見込みが切り詰められることになるのは不正義だとする主張が、明瞭に見られる〔T.J. chapter II section 17〕。しかし、こうした視角から発する正義思考が果たして格差原理の導出に際しても徹底しているのだ、と解することができるであろうか？ この問い

を核にして、第〔二〕節と第〔三〕節での探索がなされることになる。

〔二〕格差原理に孕まれる〈誘因〉要素——正当なる処遇原則を導き入れるための動機づけ

〔二〕-1 最も不遇な立場にある階層にとっての利益への焦点化

『正義論』では「最も不遇な立場にある階層」(the least fortunate group, or, the least advantaged)に属するひとたちの獲得する利益・便益に向けて関心が向けられる、という方向性が見られる〔第二章第16節〕。ここに謂う所の「最も不遇な立場」についてはただし、ロールズ自身による次のような補足説明がついていることに、注意を払うことが必要となる。

最も不遇な人びとに関するこの荒削りの定義は、……全員の身体的ニーズおよび心理的諸能力が〔極端なばらつきのない〕通常の範囲に収まっていると想定するつもりなので、ヘルスケア（保健医療）や知的能力の〔特別なニーズとその扱いをめぐる〕もろもろの問いは生じない。こうした困難な諸事例を考察しはじめると、正義の理論の埒外に及ぶようなことがらを早計に招き寄せてしまうばかりでなく、私たちの道徳上の識別能力（moral perception）までをも動転させかねない。自分達とは隔たっているながらその運命が憐憫と不安を掻き立てる人びとのことを、配慮せざるをえなくなるからである。そうではなく正義の一番目の問題はあくまでも、社会の日々の運営に全面的かつ能動的に参画しつつ、生涯を通じて（直接的あるいは間接的に）仲間と共生・連携する人びと相互の諸関係を扱う。したがって格差原理は、社会的協働に従事する市民たちに適用されるべきものとなる。[『正義論 改訂版』邦訳書 131-132頁]

上記引用文中に現われているところの、重度の障害をその身に付着させているひとたちへの社会的処遇のことは正義の理論の埒外だとする発想、これに向けては小論の重要視する視角から考えると、かなり根底的な次元で承服し難いというふうに反応せざるを得ないが、その点に関する議論はここではひとまず措く（この項の中の後段で、あらためて言及する）。むしろここでは、格差原理が適用されるのは「社会的協働に従事する市民たち」の範囲に限定されていることを、理解しておこう。その範囲内での最も不遇なひとたちにとって見込むことのできる利益をよくする限りにおいてのみ、社会的経済的不平等を——基本財の全体集合から基本的諸自由と（地位や職の獲得のための）公正な機会の平等とを除外した残りの集合の構成要素について、各階層にとっての見込み得る利益の不平等を——取り決めることができる。こうした含意の限りにおいてこれは、正義を思考する（≒志向する）に際して適切な原理的認識を示しているように見える。

格差原理が許容する不平等に関してさらに、最も不遇な階層にとっての利益の見込みを考えるにあたっては、他の階層にとっての利益の見込みとの関連性および全体社会にとっての総利益の見込みとの関連性を考えることなく進めることはできない、ということがかなり精巧な叙述を以って主張されている〔T.J. chapter II section 13〕。その主張は、ヴァン・パリースが指摘する〔Van Parijs, Philippe 2003: 209-210〕ように、ロールズにあっては格

差原理が（正義を優先させつつも）効率性を重んじる構想と整合しなければならないとされていること⁴⁾、また、格差原理の含意が原初状態についての議論と——社会の基本構造を「無知のヴェール」の下で取り決めようとする社会契約の当事者たちが、互いに他者のもつ利害には直接的な関心を払わないがしかし、自らが最も不遇なる者の立場に置かれた場合のことを考慮に入れて、受容できる便益分配のあり方を描き出す、という趣旨を以って特徴づけられている議論と——適合するとされていること、そのことを表わしていると考えてよいだろう。

さてここで、ロールズによる正義思考の中で承服し難い点として先に触れておいたところの、重度の障害をその身に付着させているひとたちへの社会的処遇のことは正義の理論の埒外だとする発想、これに言及しておこう。ロールズによる正義思考の基層においては、各人はその出発点における社会システム上の境遇の相違にかかわらず同じ成功の見通しを有するべきだ、とする見解と同時に、生来の内的資産についての自然の巡りあわせという偶有性によって各人の善き生の実現度合が左右されないという見通しを有するべきだ、とする見解も、息づいていた。このようないっそう根幹を成す見解を貫こうとする場合には、ヘルスケアや知的能力に纏わる問いを生ぜしめる重度障害者への処遇をめぐって思考しようとする「私たちの道徳上の識別能力」が動転することになるとして、重度障害者への社会的処遇を思考対象外に置き去るのは、妥当性を欠くと考えられる⁵⁾。

（二）-2 完全平等を論外と見做し、格差づけられた割り当ての当然視へと誘導する論理

容易に気づくことができるように、格差原理とは社会的協働の産出成果・利益を、そしてまた、協働のための手段として設えられる分業上の地位や職を、当の社会構成員の間で完全平等に分け合うことを論外とし——“あらためて議論するまでもなく不合理なこと”と見做し済ませて——、利益の格差づけられた割り当てを当然視した上でもたらされる原理である。ここではしかし、そうした当然視がなされる所以に遡って論及を試みる。

この点に関してヴァン・パリスは次のような説明を行なっている [Van Parijs, Philippe 2003: 203]。社会的経済的利益の獲得見込みという観点から考えて、善き生への見込みをもてる可能性度合において幸運に恵まれている階層（または集団）と幸運に恵まれていない階層（または集団）という二つの階層からなる社会を考え、しかも、恵まれた階層の見込み得ることにおける変化が恵まれぬ階層の見込み得ることに必ず影響を及ぼす、という関係様態に——ロールズの言う「緊密なる接合」(close-knitnes) 様態に——ある、と仮定する。このとき、接合されたかたちをとって網羅的でもある不平等についての二つの状況を、次の(1)・(2)として表わすことができる。(1)不平等なる状況において、幸運に恵まれていない階層は一般に、平等様態にある場合に比べてさらに悪化した利益の獲得見込みを持つことになる。(2)不平等なる状況において、幸運に恵まれていない階層は一般に、平等様態にある場合に比べてより良い利益の獲得見込みを持つことになる。(1)の状況は利益や富の総量が不変である場合にのみ成立し得ることで、社会的協働による新たな成果・利益の産出を期待できる場合には当てはまらない。社会的協働による新たな成果・利益の産出を期待できる場合に当てはまるのは(2)の方だ、と見做されることになる。幸運な階層にとっての見込みが好転すればそのことは、ある機制を通じて不運な階層にとっての見込みをも良くすることができるからである。その機制として最も多くの頻度をもって言及され

るのは、誘因が——経済的生産過程を効率のよりよいものにし、技術革新・経営革新をいっそう速く進展させて、協働の成果をより増大させようと促す誘因が——発生することだ。つまり、不平等な利益分布状況を前提にしてこそより優位な利益を獲得しようとする上昇志向や競争意識が生じ作動することになり、そのことを通じて技術革新・経営革新が、そして協働の成果の増大が、もたらされる。ヴァン・パリースによる視角からは、資源を社会的に最も有効に活用することができるひとたちのものになるようにするための方法として（＝誘因として）、利益の格差づけられた割り当てが当然視されることになってしまうのだ、と説き明かされる。これも、いましがた述べたこととほとんど等価な内容である。格差原理がその身に帯びるところの、利益の格差づけられた割り当てへの当然視に向ける視角のあり方として、このような誘因を発生させるという機制に焦点を合わせる視角を欠くことはできないだろう。

協働に纏わる利益を社会構成員の間で完全平等に分け合うことを論外とすることについて、ロールズの叙述の中では明示されていないのだが、そこを明らかにしようとするとき考え出されるのが上に示したような説明であったわけだ。ロールズ自身による（『正義論』中の）格差原理に関する叙述の中には、誘因という要素が格差原理にとって大切な意味づけを与えられていることがわかる。その例示として次の箇所を挙げておこう。「格差原理を例証するために、複数の社会階級の間での所得分配について熟考せよ。……〈財産所有の〔分散に裏づけられた〕デモクラシー〉（property-owing democracy）にあって、〔不安定な雇用と低賃金を強いられる〕未熟練労働者階級から人生を開始する人びとよりも、企業家階級の成員として出発する人びとのほうが、より良好な見通しを抱ける。……人生の出発点での見通しにおけるこの種の不平等は、何によって正当化されうるのだろうか。格差原理によれば、……予期の不平等が許容されうるのは、不平等の度合いを低減する（いっそう平等に近づける）ことが労働者階級の暮らし向きをさらに悪化させてしまいそうな場合だけに限られる。……企業家の見通しが比較的良好であることがインセンティブ（刺激・誘因）として作用した結果、経済過程の効率性の増大やイノベーション（技術や経営の革新）の進行速度の上昇などが招来される。……種々の不平等が格差原理の要求事項を充たすべきだとすると、ここまで述べてきた類いのことがらを論じる必要がある——本書の眼目はそこにおかれている。」[『正義論（改訂版）』邦訳書 106頁]

（二）-3 「緊密なる接合状況」のもとでの不平等容認論と「緊密なる接合の破壊された状況」のもとでの不平等容認論

前項で獲得した認識を踏まえてこの項では次の点を考えてみたい。最も不遇な立場にある階層にとっての最大の利益になる限りにおいて、というかたちで制約をかけた不平等を、格差原理が容認すること、そのことの基礎にはどのような正当化論理がはたらくのか、この点に立ち入って考えてみたい。考えるための示唆を与えてくれそうなのが、ヴァン・パリース [Van Parijs, Philippe 2003: 204-208] である。

社会構成員の階層上の類別を、ここでもまた単純化して、幸運に恵まれた階層と幸運に恵まれなかった階層という二つの階層からなるとしよう。また、この二つの階層間の利害関係について、一方には緊密なる接合状況があるとし、他方には緊密なる接合の破壊された状況があると仮定する。「緊密なる接合状況」のもとでの不平等を正当化する論理と

「緊密なる接合の破壊された状況」のもとでの不平等を正当化する論理との相違を、ヴァン・パリースは以下のように論じている。

まず、「緊密なる接合状況」のもとでの不平等を正当化する論理について。ある時点での利益見込みを基準にして、幸運に恵まれなかった階層にとってより良い見込みやより悪い見込みを持てるのは、次の三つの場合になる。《接合1》幸運に恵まれた階層の利益見込みがより悪くなるならば、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて良くなる。《接合2》幸運に恵まれた階層の利益見込がより悪くなるならば、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて悪くなるが、幸運に恵まれた階層の利益見込がより良くなるならば、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて良くなる。《接合3》幸運に恵まれた階層の利益見込がより悪くなるという条件の下でも、幸運に恵まれた階層の利益見込がより良くなるという条件の下でも、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて悪くなる。

以上の三つの場合の中で《接合3》の場合に、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みがある時点で最大化していることが、示されている [ibid. pp. 204-205]。格差原理が要求しているのはこの場合のことなのだ、と見て取れる。《接合1》が含意しているのはどういうことかということ、ある利益の配当計画のもとで完全なる平等様態と比較してどれほど多くの改善が幸運に恵まれなかった階層の利益見込みに向けてなされることになるとしても、もしその配当計画よりもいっそう平等主義的な利益の配当計画が幸運に恵まれなかった階層にとってより高い水準の利益見込みに到達させることになるならば、その配当計画は公正な——ロールズ流の含意での「公正な」——配当計画ではありえない、ということなのだ。《接合2》が含意しているのはどういうことかということ、ある利益の配当計画のもとで完全なる平等様態と比較してどれほど多くの改善が幸運に恵まれなかった階層の利益見込みにに向けてなされることになるとしても、もしその配当計画よりもいっそう不平等主義的な利益の配当計画が幸運に恵まれなかった階層にとってのより高い水準の利益見込みをもたらすならば、それは公正な配当計画（という集合に属する要素のひとつ）ではあっても完全なる公正性を帯びた配当計画ではない、ということなのだ。格差原理を論じる場面でのロールズの正義思考に照らして完全なる公正性を帯びているのは、《接合3》であったことになる。

次いで、「緊密なる接合の破壊された状況」のもとでの不平等を正当化する論理について。この論理が、「緊密なる接合状況」のもとでの不平等を正当化する論理と比べてどこが基本的に異なるのかということ、幸運に恵まれ暮らし向きのよいひとたちの利益見込みの上昇または下降によって幸運に恵まれなかったひとたちの利益見込みが影響されずに留まることがあり得る、とする可能性の生起を認めるところである [ibid. pp. 205-206]。そうすると、先ほど、格差原理の要求する場合として（完全なる公正性を帯びている場合として）示した《接合3》が保持され得なくなり、これとは異なるかたちを採ることになるのだ。このような状況での利益配当に論及する必要がある理由は、主に次の二つにあると推察される。第一に、先に例示した誘因への配慮に結び付けて格差原理を説明するロールズの論脈では、幸運に恵まれ暮らし向きのよいひとたちにとっての（その立場本位の）利益見込みが主導するかたちで幸運に恵まれなかったひとたちの利益見込みの帰趨が（副次

的に) 想定される傾きが見られ、そのときには幸運に恵まれなかったひとたちの立場にとっての相対的な利益見込みへの感度が鈍化するおそれが生じているからだ。第二に、第二章第19節での自然本性的な義務に関する論脈では積極的な相互扶助の義務とその重要性において並置されるかたちで、他者に不利益や痛みを与えない「消極的な義務」が正義の諸原理の中に位置づく個人に関する原理として挙げられているからだ。この理由は、原初状態で当事者たちが互いに他者の便益には無関心な態度と思考を以って行為することを、格差原理の解釈と関連づけるところから出てくる、と推測することもできる。

「緊密なる接合の破壊された状況」(……以下では、「不接合」と呼ぶことにする)のものとしての不平等を正当化する論理について、さらに立ち入って考えてみよう。ここでもヴァン・パリースの提起している論点を受け留めるところから、議論を進めていこう。ある時点での利益見込みを基準にして、幸運に恵まれなかった階層にとってより悪い見込みや基準時点での見込みと同等の見込みを持てるのは、次の三つの場合になる。《不接合1》幸運に恵まれた階層の利益見込みがより悪くなるならば、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて悪くなる。しかし、幸運に恵まれた階層の利益見込みがより良くなるとしても、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて同等に留まる。《不接合2》幸運に恵まれた階層の利益見込みがより良くなるならば、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて悪くなる。しかし、幸運に恵まれた階層の利益見込みがより悪くなるとしても、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて同等に留まる。《不接合3》幸運に恵まれた階層の利益見込みがより悪くなるという条件の下でも、幸運に恵まれた階層の利益見込みがより良くなるという条件の下でも、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みは、ある時点での利益見込みに比べて同等に留まる。

これらの内で、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込みがある時点で最大化し、かつ、格差原理の要求に適合してもいるのは、換言するなら、格差原理が要求しているのは、《不接合2》である。これはヴァン・パリースの明示している論点だ。ヴァン・パリースによる論考ではまた、《不接合1》～《不接合3》では幸運に恵まれた階層にとっての都合よさを判断基準にして事態が評価されることになる、という論点が示されるに及んでいる。それらを踏まえ小論の問題関心を基にしてさらに論及しておこう。上記の三つの場合のいずれにおいても、幸運に恵まれなかった階層の視点からはその利益見込みの最大化が基準時点において到達されている、と言える。しかもこれらいずれの場合にも特徴的なのは、部分的にではあれ、幸運に恵まれなかった階層にとっての利益見込み(……この項での論述の範囲内では以下、便宜上、「前者」と表わす)のありようによって制約されずに幸運に恵まれた階層にとっての利益見込み(……この項での論述の範囲内では以下、便宜上、「後者」と表わす)が変動する可能性が組み込まれていることである⁶⁾。この認識を基礎にして、あらためて、格差原理の含意に向けたロールズ自身による叙述を探ると、前者の不変という条件下での後者の増大が受容されると解釈し得る箇所が見つけ出されるのだ [ex. *T.J.* p. 79, pp. 104–105]。

あらためてここで留意されるべきなのは、第一に、《接合1》～《接合3》と《不接合1》～《不接合3》というこれらいずれにおいても、後者が主導して前者が評価され想定

されることになっている点であり、第二に、《不接合1》～《不接合3》に現われる特定の脈絡では前者のありようが後者を副次的にでも制約する余地が認められていない点であり、第三に、前者も後者も相対的な観点から捉えられるのではなく、絶対量の水準から捉えられている点である。これらを総合して推察できるのは、次のような解釈を呼び込む余地があるということだ。すなわち、格差原理の中で（第二原理の前半部で）表わされているところの、すべてのひとの利益になると合理的に見込み得る限りで社会的経済的不平等が取り決められるということが、実のところ、そこに葛藤や困難が生じた際の落着のさせ方として後者が重要視される中での取り決めを許すことになる、という解釈である。この解釈は、前項で考察した誘因を発生させ機能させることを重要視するという脈絡では、いっそう強化されることになるだろう。

この項では、格差原理の含意についてそれがむしろ不平等主義の方向へと流される余地を蔵していることに、論及したわけであるが、そのような余地を蔵することになる要因のひとつとして次項では、格差原理が統御しようとする対象に関して考察する。

（二）-4 格差原理の統御の対象——諸個人の意識をめぐる

「正義の二原理」を導出するにあたって殊のほか重要な役割を果たす原初状態についての記述の中では、当事者たちが互いに他者のもつ利害には関心を払わないと特徴づけられていること。また、正義の第一原理で各人に基本的諸自由が保障されるべきことが、最優先事項として挙げられていること。これらの形式的な理解によって、格差原理の含意について次のように考えるという筋道を提示する、ということが想定されるかもしれない。すなわち、それぞれに利己的な利害意識を持つ諸個人からなる社会構成員たちが交渉することによって格差原理が具象化されるとし、その具象化のあり方は、最も不遇な立場のひとたちの最大利益となるようにするという想念を（いわば消極的に）各人が念頭に置きつつ、基本的には各人の発揮する交渉力の合成の結果というかたちをとって取り決められる、という考え方の筋道。この筋道は、ロールズのいう「秩序だった社会」(well-ordered society)——正義の二原理によって事実上統制されている社会——についての記述 [T.J. chapter VIII, section 69] に照らすならば、誤りであることが明らかである。つまり、「秩序だった社会とは、〔1〕他の人びとも同一の正義の原理を承認しており、そして〔2〕基礎的な社会の制度がその原理を充たしかつ充たしていることが周知されている、以上の二点を全員が承服・承知している社会である。」[『正義論（改訂版）』邦訳書 595頁]ここに表わされている、正義の原理（無論その中に格差原理が含まれる）と秩序だった社会との関係に関する認識を、格差原理の具象化のあり方について議論しようとする際には、確保すべきであろう。

この点を踏まえるならば、前項で取り挙げたような誘因を発生させる機制や効率性という想念に支配された格差原理の解釈の仕方は、斥けられるべきことが理解されるだろう。利己的意識の積極的な発動を許すのではなく、むしろ正義の原理に集約される正義思考の中に格差原理を位置づけた上で、そこから得られる格差原理の解釈のあり方が諸個人の意識や行為指針を統御すべきなのである。そのような統御の方向において、互いに他者のもつ利害に関心を払い合う中で、格差原理の具象化のあり方が探られるべきことになる。

(三) 格差原理は道德上の恣意性をいかにして取り扱うべきか

(三)-1 〈運の中立化〉から見た格差原理の誘因要素

ここで考察対象にしようとするのは、格差原理の誘因要素はいかなる場合にも正当化されるのか、実践理性を持つすべての社会構成員が正義思考に依拠することで正当化されるのか、つまり格差原理の誘因要素に向けての普遍的で包括的な正当化がなされ得るのか、という問いである。この考察に際して手がかりとなりそうなのが、ジェラルド・コーエンによる論考 [Cohen, Gerald Allan 1992] である。

幸運に恵まれずに利益獲得の見込みという観点から不利な者たちが、有利な者たちから作為的に提示されてくる社会経済的不平等を受容するに到る論脈⁷⁾を、単純かつ明瞭に説明するために、コーエンは次のような論理の流れを挙げている。【規範に関する大前提として】：暮らし向きの最も悪いひとたちの暮らし向きを向上させるときには、経済的不平等が（やむなく）正当化される。【事実に関する小前提として】：所得税の最高課税率が40パーセントである場合には、(a)最高課税率が60パーセントである場合に達成する生産成果に比べて、有能で富裕なひとたちはより多くの生産成果を達成することができる。(b)その結果として、暮らし向きの最も悪いひとたちは物質的な面で暮らし向きが向上する。【結論】：所得税の最高課税率は40パーセントから60パーセントへと再び引き上げられる（修復される）べきではない。[*ibid.* p. 271] この論理の流れに対して一方で分析的に気づくことができるのは、①事実に関する小前提の中の特に(a)の箇所において（有能で富裕なひとたちに生産活動上の成果を高めるべく尽力させるところの）誘因が作用したのであるということ、②小前提中の特に(b)の箇所において（生産成果の向上による利益がたんに有能で富裕なひとたちの手中に独占されるのではなく）なんらかの再分配の仕組みを通じて暮らし向きの最も悪いひとたちにとっての暮らし向きの向上をもたらしたことが、③結論の中に想定される、有能で富裕なひとたちと暮らし向きの最も悪いひとたちとの間の格差は、（最高課税率60%に比べて40%の場合には）縮小するよりもむしろ拡大することになっている可能性が多々であること、である。他方でこの論理の流れを総合するかたちで気づくことができるのは、規範に関する大前提では優先的に考慮されるところの、他者の便益を尊重し合う思考が、事実に関する小前提では後景に退き、代わってむしろ互いに他者の便益に無関心な思考が表面化することになっていて、そうした大前提での思考と小前提での思考との撞着した折衷として、結論が性格づけられることである。

このような思考上の撞着をもたらす根因を探るならば、『正義論』の第二章には力強く底流していた〈運の中立化〉と呼び得る思考⁸⁾が——不運に見舞われたひとにとっての善き生への見込みが切り詰められることになるのは不正義だとする規範的思考が——、事実的な効果として誘因という要素が強調される論脈を以って格差原理が論及される箇所（第二章第13節）では、退却することになった、と考えられる。正義思考のあり方を規範的に探究しようとする構えにとって、このことは重大な論点になる。

(三)-2 互いに他者たちに負っていること

前節から本節第一項にかけて議論してきたことをここでは、「互いに他者の便益を尊重し合う思考」と「互いに他者の便益に無関心な思考」とを対比させるかたちで、整理する

ことにしよう。

格差原理を解釈するにあたって、誘因という要素が格差原理の重要な含意として蔵されているのだ、とする見解が前面に押し出される論脈では、社会的協働に参加するひとたちはそれぞれ互いに他者の便益には消極的な関心にとどまる態度と思考を以て、関わり合うことになる。そのひとたちは自らにとって得られる便益と自ら負うことになる負担との功利的計算を中心にして、他者との交渉に携わる傾向を帯びるだろう。既に言及したように、ロールズの叙述の中にこの論脈が確かに見て取られる。しかしながら、社会的協働それ自体および社会的協働の成果の分配は互恵性という観点からなされるべきだとする思考、さらにまた、道徳上の観点からするとまったく恣意の所産というほかない不運が確かに存在し、その不運に見舞われたひとにとっての善き生への見込みが切り詰められることになるのは不正義だとする思考、これらもまたロールズによる論脈の中に確かに見て取られる。これらの思考に依拠して格差原理を解釈する論脈では、社会的協働に参加するひとたちはそれぞれ互いに他者の便益を尊重し合う態度と思考を以て関わり合うことになる。そして我々が確認することができるのは、双方の論脈が撞着を来すことなのであった。

〔三〕-3 格差原理に対する評価の落着点

いましがた述べた撞着を覚識するところから、いかに対応すべきなのか。小論でのこれまでの探索を通して、次のように暫定的な解答を引き出すことができるだろう。端的に言って、誘因という要素の大切さを強調し利己的个人間の（交渉による利益分配上の取り決めにかかわっての）利害調整を図るための原理として格差原理を解釈するのは、誤りである。共同社会において互いに他者たちに負って生きているひとたちが、道徳上の恣意に——ひとの生が運によって翻弄されることに——無自覚な様態に留まるのではなく、それを矯正する方向に正義思考を促し合い共有しようとする。そのことのための拠り所のひとつとして、格差原理を解釈する、という暫定的解答が引き出されるのだ。それは、下記のロールズによる、格差原理の狙うところを示した件にも、適合する解答だといえるだろう。

有利な立場に生まれ落ちた人びとは、たんに生来の才能がより優れていたというだけで、利益を得ることがあってはならない。……より卓越した生来の能力を持つに値する者は誰ひとりいないし、より恵まれた社会生活のスタート地点を占めるに値する者もない。……次のような社会システム——代償として相対的利益の補償を与えることあるいは受け取ることがないならば、生まれもった資産の分配・分布における恣意的で無根拠な境遇もしくは社会生活を開始する地位から〔不当な〕利得を挙げたり損失をこうむったりする者が皆無であるような、社会システム——を創設することを願うのであるなら、私たちは格差原理へと導かれることになる。

[ジョン・ロールズ（川本隆史・福間聡・神島裕子訳）2010、137頁]

〔結びに代えて〕

小論は、『正義論』の中の格差原理を対象として、そこに含意されている正義思考の身を解明するために、格差原理に孕まれる〈誘因〉要素を解説する仕事に重点を置いて取

り組んだ。この仕事に取り組む過程を経て、(特にヴァン・パリースとコーエンからの示唆を得つつ、)〈誘因〉要素の重視は誤りであって、道徳上の恣意に支配された様態を脱し矯正する方向を採って正義思考を促し合い共有するための拠り所のひとつとして、格差原理を解釈することにこそ、妥当性を見出すことができる、という暫定的な結論を得るに到った。残された課題として、何よりも、正義の原理を論じるいわば中心部においてロールズが何故に誤った解釈に囚われることになったのか、この点を、ロールズによる叙述の細部にわたって検討を加える、という課題があることを銘記しておこう。

註

- 1) このことは簡単に結論づけられるわけではなく、本来、丁寧な論証を経て初めて得られる結論である。この点は小論の主題ではないので、この箇所での論証を省き、[西口 2006] や [立岩真也 2000] への参照を求めることに留める。
- 2) この点に関連してこの議論は、評価や選抜・配分が必要不可欠となる場面があることを念頭に置き、また、教育システム—全体社会の接続のあり方を意識しつつ、次のように述べられている。「教育システムをゆがめてしまわないで、かつ、能力評価される諸個人が選抜システムや市場に従属しない人間形成ができるような、評価や選抜の仕組みがどうできるのか。また、格差や排除を極力抑えた選抜のしくみがどうできるのか。——そうしたことは、評価や選抜のルール設定や適切な規制によって、一定程度可能なはずである。」[広田 2011: 268-269] 諸個人への社会的処遇の正当なあり方をなによりもまず正義の視座から問おうとする小論の立場からは、広田による上記の結論的言明も受容できる内容である。
- 3) この視角は、ロナルド・ドゥオーキンやリチャード・アーヌソンやジェラルド・コーエンらによって提示されてきた視角と同様の性質のものである。また、小論の第零節第③項で次のように記した、ロールズから汲み取れる見解にも、深く関連する。すなわち、「各人はその出発点における社会システム上の境遇の相違にかかわらず同じ成功の見通しを有するべきだ、とする見解と同時に、生来の内的資産についての自然の巡りあわせという偶有性によってひとの生の成功度合が左右されないという見通しを有するべきだ、とする見解」。
- 4) これは、効率性への重視度合を著しく低下させてでも最も不遇な階層の最大利益を優先すべきだとするいわば“より徹底して平等主義的な正義思考”に対して、格差原理に込められた正義思考が一線を描いていることを示す。なお、このような脈絡で持ち出される効率性とはどのようなことかについて、ロールズが明確に説明しているわけではない。さしあたり推定されるのは、利己的諸個人の行為が構成要素になる社会的協働が円滑になされ、その成果の分割の方法が合意を以って取り決められるようになっている、そのような様態のことを、正の効率性の立ち現われと見做しているのであろう、ということである。
- 5) 重度障害者を格差原理の（ということは正義の原理の、ということでもあるのだが）直接的な対象の外に置こうとする発想に向けては、ここで筆者が述べたのと趣旨を共有し得ると思われる批判的見解を、アマルティア・センによる論文「何の平等か？」(1980年)の中に見出すことができる。「正義論の基礎構造を構想するにあたって、実質的な理論が障害者の問題をうまく後回しにできるはずがない」[セン『合理的な愚か者』邦訳書 261頁]。
- 6) このような状況下での“公正”が、パレート最適の配分基準と重なり合うことを、指摘しておくことができるだろう。社会的経済的利益の割り当てについての効率性に重みが掛けられることになる、ということをも併せて。
- 7) この論脈は、1988年に保守党サッチャー政権下のイギリスで大蔵大臣であったニジェール・

ローソンによって主導された税制変更の論理を引き合いに出しつつ、提示されている。その種の税制変更（あるいはまた“経済財政改革”）の場面にも適用可能な内容上の性格をもつものとして、格差原理の誘因要素が説明され得るのだ、という含意を込めて。

- 8) 〈運の中立化〉について筆者は別の論稿で、『正義論』第二章第17節の中の注目すべき件を引きつつ、次のように説明した。「自らの制御が及ばずそれゆえ責任を負うことができない事柄によって、すなわち、不運/幸運によって、処遇の上で不利になったり有利になったりすることのない社会システムを創設しようとする志向」のことを、〈運の中立化〉志向と呼ぶことにする [西口 2015 : 30]。

文 献

- Cohen, Gerald Allan 1992. Incentives, Inequality, and Community, (in *The Tanner Lectures on Human Values*, Vol. XIII, Peterson, G. B. (ed.), University of Utah Press)
- Rawls, John 1971. *A Theory of Justice*, Oxford University Press 《本文中では T.J. として表記》
- Van Parijs, Philippe 2003. Difference Principles, (in *The Cambridge Companion to Rawls*, Freeman, S. (ed.), Cambridge University Press)
- アマルティア・セン (大庭健・川本隆史訳) 1989 『合理的な愚か者』 (勁草書房)
- 広田照幸 2011 「能力にもとづく選抜のあいまいさと恣意性—メリトクラシーは到来していない」 (宮寺晃夫編 『再検討 教育機会の平等』 岩波書店)
- ジョン・ロールズ (川本隆史・福間聡・神島裕子訳) 2010 『正義論 (改訂版)』 紀伊國屋書店
- 西口正文 2006 「不平等再生産と教育をめぐる問題構制—〈能力の私的所有〉への問いに照準して—」 (『人間関係学研究』 第4号)
- 西口正文 2015 「エリザベス・アンダーソンによる「運の平等主義」批判—〈平等〉へのまなざしに照準して—」 (『人間関係学研究』 第13号)
- 立岩真也 2000 「「能力主義」という差別」 (『季刊 仏教』 50号)